

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	インドネシア人高校生に対する日本語教授法
Author(s)	リリアンティエ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1993 : 1 - 6
Issue Date	1994-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039342
Right	
Relation	



で質問することができない。

そして石田敏子氏はこの方法では教え方が難しく、学習者側の不安をさそいやすい、また微妙な点の理解についての確認も難しいと付け加える。

上の説明を考えると文法訳読方式は文化学・文学に適當であるが会話には適當ではないと思う。直接教授法はとてもいい教授法であるがしかし、授業中、日本語のみ使う点を見ればインドネシアの高校ではこの教授法が実行されるのは教師と生徒の日本語能力から考えるとまぎらず無理だと思う。

B. 日本語教育に影響を与えた教授法
 前述の教授法は読書を重視すると言える。一方、外国人が作った教授法はたいてい子供が母語を学ぶように、ドリルで口頭練習し、ネイティブスピーカーが言う通りまねをして反応する方法を勧める。
 次に外国人によって提唱された教授法である。

1. ベルリッツ式教授法

外国語を習得するには、子供が母語を学ぶのと同じように耳で聞いてその通りに反復すればよい。

2. ゲアン式教授法

外国語は赤ん坊が習うと同じ方法で習わねばならない。
 ・言葉を客観的なもの、抽象的なもの、比喩的なものに分け、客観的な言葉から入る方がよいとし、客観的な語彙を教室で教師が使って教える。

3. パーマ、オーラル・メソッド (Oral Method)

・母語を仲介にせず、口頭練習を重視する。
 ・入門期の3～6週間には口頭練習のみを行う。
 ・いろいろの方法や各種の教科書を使う。
 ・ドリルも沢山行う。

4. オーディオ・リンガル・アプローチ (Audio Lingual Approach)

・学習者の母語と習得すべき言語を比較研究し、両者の共通点と相違点を知り、これを基にして教材を選び、注意深く配列する。
 ・口頭練習を重視し、文型練習を中心とした多量のドリルを与える。

5. アーミー・メソッド (Army Specialized Training Program)

・授業は大学の語学教授による文法解説とネイティブスピーカーによるドリルに分けられる。
 ・文法は実用の面から機能に重点をおいて説明される。
 ・ドリルのクラスでは文法説明や母語の使用は禁止され、日常生活でも学んでいる外国語が使われる。

(4)

C. 新しい教授法

これらの教授法に共通していろのは学習者が言いたいことを重視し、教室の主役は教師ではなく学習者とする点である。教師の役目は問題に直面している学習者の洞察を促進する手助けをすることにある。

「石田敏子氏」

1. コミュニティ・ランゲージ・ラーニング

(Community Language Learning・CLL)

CLLの段階はミステップに分けられる。第一ステップ、最初は言いたいことを母語で言い、教師は耳もとで翻訳する。または助けなしに外国語で言いたいことを言い、次に母語で言ってもよい。あるいは外国語で直接話し、求められたときのみ母語の訳を言う。学生は言い通してテープに録音する。最後は学習者は基本的に正しい外国語で話し、教師は自然な表現法として語彙や構文のニュアンスの違いを教えるようになる。

第二ステップ、録音した会話を全部通して再生する。第三ステップ、録音した会話を一文ずつ、もう一度再生する。この方式の段階を見たらとにかく通訳能力が高い教師を要求され、かなり時間がかり、録音道具も必要である。また、この教授法は全く初歩の段階よりも、基礎的レベルを終えた学習者の会話力を上げるために適している。というわけで初歩と云えるインドネシアの高校の日本語学には不適当であることが分かる。

2. 沈黙教授法 (Silent Way)

- ・ごく限られた範囲の語彙を使って発音と構文的要素の理解と用法を習得させることに力を集中する。
- ・最初から学習者が話し、教師はほとんど沈黙している。
- ・常に発音はある動作を伴い、逆に動作はある発音を伴う。
- ・学習者は互いに助け合って学ぶ。

3. カンペストペディア (Suggestopedia)

- ・学習者が子供のような率直さ、柔軟性、独創性を持つ状態 (幼児化 *Infantilization*) に達するのを助ける。
- ・教材は原則として10の会話からなり、母語の対訳がつけられる。
- ・内容は学習者の日常生活と密接な関係があり、学習者の興味をひくようなものでなければならない。

4. 全身反応教授法 (Total Physical Response)

- ・教師は学習すべき言語で命令し、その動作をして見せる。
- ・学習者は教師の命令通りの動作をすることによって新しい言語を学ぶ。
- ・学習者は自分でその言語を使って言いたくなるまでだまっていてもよい。
- ・教師は学習の発話を初期の段階で強制してはいけない。

(6)

が素材から規則を発見する形で与える。いろいろな方法や各種の教科書を使う。日本語・インドネシア語辞典を使わせる。

5. 参考文献

- ・石田敏子「日本語教授法」第10刷発行1992年、大修館書店
- ・木村宗男他「日本語教授法」第6刷発行1993年、桜楓社
- ・永保澄雄「はじめて外国人に教える人の日本語直接教授法」第7刷発行、創拓社
- ・「外国人への日本語の教え方入門」1993年3月25日発行、アルク発行